Zipangu Label

https://www.zipangu-label.com

Discography

ROSCO
2005 [ROSCO/ZIP-0015]
2,619 円（税込）

セルフタイトルのデビューアルバム。今＝現代を生きる人々に共感を得るはずの＜現代音楽＞こそがROSCOのめざす音楽。一柳慧、近藤譲、甲斐説宗、福井とも子の作品を収録。

RACOONDOG
2008 [ROSCO/ZIP-0028]
2,619 円（税込）

1stアルバムから3年、夏田昌和、伊左治直、鈴木治行、ROSCOのために編曲されたビートルズから椎名林檎までのポピュラーソングを収録。2011年に譜面も発売。

てふてふもつれつつ かげひなた
2016 [ROSCO/ZIP-0056]
1,100 円（税込）

結成15周年記念ミニアルバム。ふたりが長年演奏し続けてきたストラヴィンスキーのデュオコンチェルタンテを中心に、夏田昌和、台信 遼、川上統、木ノ脇道元の作品を収録。

Zipangu Omnibus vol.1
2017 [V.A./ZIPA-001]
LP 5,500 円（税込）

アナログレコード盤でZIPANGU LABELを聴く。ジパングレーベルおよそ６０枚のアルバムから選曲されたオムニバスレコード。CD『Racoondog』より伊左治直編曲「証城寺の狸囃子」を収録。

めぐる～MEGURU
2014 [ENSEMBLE NOMAD/ZIP-0048]
3,080 円（税込）

無類の個性豊かな演奏家によって結成されたアンサンブル・ノマド。結成17年を記念してルネッサンスのスコットランドから、アフリカ、ヨーロッパ、アジアまで全９ヵ国を巡る楽曲を収録。

dna
2009 [Ayuo & seashell /ZIP-0033]
CD&絵本 2,750 円（税込）

Ayuo、オリジナル作品集。弦楽四重奏「seashell」（甲斐史子、佐藤佳子、松本卓以、大鹿由希）、室内楽的なギター、歌やインド神話に基づく語りなど。

ROSCO'S Music Library vol.1 Racoondog
2011 [ROSCO]
楽譜 2,934 円（税込）

CD『Racoondog』より、気鋭の作曲家８人による、ヴァイオリンとピアノのためのポピュラー曲の編曲集。

Les chants prehistoriques ～les oeuvres de Masakazu Natsuda～
2013 [夏田昌和 /ZIP-0038]
3,143 円（税込）

先史時代の歌、夏田昌和作品集。ソロや室内楽の作品をROSCOをはじめとする優れたプレイヤー達が演奏。５カ国語で構成されたブックレット付き。

KOHAKU 歌われる詩たち
2015[KOHAKU/ZIP-0054]
CD&詩集 1,650円（税込）

吉川真澄（うた）柏木麻里（詩）大須賀かおり（ピアノ）の三人による童謡ユニット“KOHAKU（コハク）”。詩人と作曲家、演奏家によって生まれたオリジナル作品集。

https://www.zipangu-label.com　ジパングプロダクツ(株)

第75回 文化庁芸術祭 レコード部門 優秀賞

アメリカを代表する あまりに斬新な作曲家の 真の姿がここに浮かび上がる!

アイヴズ：
ヴァイオリンとピアノのための４つのソナタ

ROSCO／甲斐史子（ヴァイオリン）大須賀かおり（ピアノ）

◎ソナタ第１番
◎ソナタ第２番
◎ソナタ第３番
◎ソナタ第４番〈野外伝道集会の子供の日〉

ALM RECORDS／コジマ録音　ALCD-7248　税込価格 2,970円

Next Stage

佐藤紀雄 公園通りプロデュース
シリーズ vol. III

ROSCO 20 Anniversary bis
－ おかえり ROSCO !! －

日時　2022年 5月8日（日）15時開演
場所　渋谷公園通りクラシックス

プログラム
シューマン　ヴァイオリンソナタ第１番
ブリテン　組曲 op.6 他

ROSCO

結成 20 周年

記念リサイタル

東京オペラシティ
リサイタルホール
2022.2.11（金）19時開演

主催：ROSCO AVEC
後援：桐朋学園大学音楽部門同窓会　関西桐朋会
日仏現代音楽協会
特定非営利活動法人・日本現代音楽協会
助成：公益財団法人東京都歴史文化財団 アーツカウンシル東京

ARTS COUNCIL TOKYO

ROSCO 20 ROSCO

Greeting
ごあいさつ

20周年によせて…

本日はお寒い中、またコロナ禍にも関わらずご来場頂き本当にありがとうございます。
私たちは桐朋学園大学時代に室内楽を通じて出会い、2001年に ROSCOを結成致しました。デュオ名はアメリカの抽象表現主義画家、マーク・ロスコに由来しています。（ギタリスト、アンサンブル・ノマド芸術監督 佐藤紀雄氏によって命名）
ロスコの作品のようにお互いの色を尊重し、時には反発し、融合し合い、ひとつのものを創造していくという壮大な野望を掲げながら今日まで続けてこられたことにあらためて感慨を覚えています。
私たちの周りには常に刺激的で個性的で才能に溢れた沢山の作曲家の方々や演奏仲間の存在がありました。更に、マイペースで呑気なデュオであるにもかかわらず、結成当初からCD リリースや沢山の演奏活動の機会を下さったジパングレーベルの横田義彰会長をはじめ、ここには書ききれませんが全ての現場で関わった方々が私たちを育ててくださいました。
価値観や距離感、色々な物事がものすごいスピードで変わり続ける現代社会ですが、私たちはこれからも初演、再演を繰り返し、ひとつひとつ大切に演奏を重ねていきたいと思っています。
本日も会場で生まれる新しい音楽を皆さまと共有できることを心より楽しみにしています。

ピアノ　大須賀かおり

本日は、ご来場ありがとうございます。20年本当に沢山の方達、作品との出会いに導かれ多くのことを重ねてくることが出来ました。そのひとつひとつに感謝しております。
大須賀さんとは、一人では到底進めない道のりを一緒に登ったり降りたりして来ました。
この数年、誰もが何が大切か何が出来るかを考えたり悩んだりして、いろいろなエネルギーが溜まっていると思います。先が見えない不安もありますが、そのエネルギーから新しいものが生まれ、出会えることを楽しみに更に先へ進んで行きたいと思います。

本日は、20年重ねてきたことを、ばっちり発揮できる最高のプログラムに挑戦します。聴いてください！

ヴァイオリン　甲斐 史子

Message
メッセージ

甲斐さん、大須賀さん、ロスコ設立 20 周年おめでとうございます。マーク・ロスコの画面を区切る二色が相対するように見えてその差異がかけがえのない存在としての表現の要素であるように、個性的な二人の響き合いはいつも、他では聴くことのできないスリリングな照らし合いで私たちを愉しませてきました。今日は 20 年の歩みを振り返りながら心ゆくまで二人の演奏を味わいたいと思います。

＜ギタリスト・アンサンブルノマド芸術監督　佐藤紀雄＞

1999 年頃、甲斐さん、大須賀さんと演奏会企画をご一緒していました。彼女達はまだ学生で初々しく、初演や日本初演となる作品を演奏することに目を輝かせていたのを懐かしく思い出します。ある日、お二人でデュオを組むという話を聞きました。佐藤紀雄先生に ROSCO と命名していただき活動が始まり今に至ります。それぞれの異なる人生の歩みの中で、20 年という長い年月を ROSCO として継続できたのは、彼女達の日々の努力は勿論のこと、いつも明るく楽しいお二人の深奥に、互いを尊重する心、互いに敬意を持って接する温かさと強さが備わっているからだと感じています。それこそがまさに ROSCO が作り出す音なのでしょう。20 周年おめでとうございます。今後も四半世紀、半世紀へと時間のカンバスに音を描き続けてください。

＜作曲家・桐朋学園大学教授　金子仁美＞

ROSCO は、20 年前も現在も、作曲家たちにとって希有な存在といって良いだろう。彼女たちの紡ぎ出す音たちは、作曲家が想像していた以上の音による表現世界を描き出してしまうからだ、不敵にも！それはしかし、聴き手にとってはどうでもよい問題かもしれない。いまだかつて誰も現わすことができなかった音たちが飛び交う、恍惚の刺激的＜音楽＞の発信核なのだから。更なる期待をこめて。

＜Zipangu Label 代表　横田義彰＞

ROSCO結成二十年に寄せて　＜音楽批評＞ 石塚潤一

ROSCOを初めて聴いたのは、2003年のことだ。

その前年、ROSCO は日本現代音楽協会の主催する現代音楽の演奏コンクール:競楽を制し、これを記念して開催されたコンサートがあった。近藤譲への委嘱作品、一柳慧、福井とも子、藤井喬梓、そしてクセナキスの《ディフサス》などを聴き、演奏のレベルもさることながら、会場のトッパンホールが満席だったことに驚いた記憶がある。そこには、新作の委嘱を含めた邦人作品と西洋音楽史上の異端的名品を組み合わせるという、ROSCOのその後の活動の方向性が、既に顕れていたことに(今さらではあるが)気付く。

セザール・フランクの生誕 200 年に当たる本年。ヴァイオリン・ソナタをはじめとしたヴァイオリンとピアノのためのレパートリーに、一層大きな注目が集まるに違いない。良く知られているように、古典派までのヴァイオリン・ソナタは、(モーツァルトのソナタがそうであるように) 鍵盤楽器のソナタにヴァイオリンのオブリガートが付随しているものだった。ヴァイオリンとピアノとが同等の存在感をもって競奏するヴァイオリン・ソナタは、鬼才ベートーヴェンの≪クロイツェル・ソナタ≫が嚆矢であり、ヴァイオリンとピアノのための名曲の多くが、ロマン派から近代にかけて作曲されてきた。しかしながら、20世紀、特に後半になると、この編成は創作のスポットライトからは些か外れていく。

それはおそらく、弦楽四重奏のような編成に比べて、ヴァイオリンとピアノのために本格的な作品を書くということは、より大きな伝統の重力を受ける、という理由によるのだろう（それを裏付けるように、日本人作曲家のヴァイオリン・ソナタは、伝統の習得を確認するように、キャリア初期に書かれる傾向がある。篠原眞、三善晃の作品が代表的なところだが、諸井三郎、松平頼則、松平頼曉らの作品も挙げられよう)。この編成のための創作は、伝統回帰が最適解なのか？決してそうではないはずだ。クセナキスは極めて独自のメチエにより≪ディフサス≫のような怪物的な作品を書き得たし、モートン・フェルドマンにもヴァイオリンとピアノのための優れた作品が幾つかある。ROSCO の、特に甲斐史子の原点としての、甲斐説宗の≪ヴァイオリンとピアノのための音楽≫も忘れるわけにはいかない。

ヴァイオリンとピアノ。この編成には未だ拓かれていない可能性があり、ROSCO はそのことを知っている。チャールズ・アイヴズのように、優れた内実を持ちながらも、先鋭性ゆえに十分にその魅力が共有されていなかった作品に新たな価値を付与した、ROSCOならではの視点があるがゆえだ。ピアノが単なるヴァイオリンの伴奏にまわったり、またはその逆であったりするのではない、双方が緻密なアンサンブルを繰り広げる、伝統的回帰的ではない音楽。それはつまり、ROSCO の活動とは、真の意味での「現代のベートーヴェン」を発掘するということなのかも知れない。そのことを通じて、ヴァイオリンとピアノという編成を、再び創作の花形へと返り咲かせること。そうした途方もない企てとして、我々は ROSCO の活動を注視せねばならない。

Program
プログラム

一柳　慧
Toshi ICHIYANAGI
シーンズ I
（1978年）
Scenes I for violin and piano (1978)

チャールズ・アイヴズ
Chares IVES
ヴァイオリンとピアノのためのソナタ第2番
（1902－1910年）
Sonata for violin and piano No.2 (1902－1910)

休 憩

桑原　ゆう
Yu KUWABARA
リリスの儀式
（2022年　ROSCO委嘱作品　初演）
Rites of Lilith (2022)

北爪　裕道
Hiromichi KITAZUME
クロマティクス
（2022年　ROSCO委嘱作品　初演）
Chromatics for violin and piano (2022)

大胡　恵
Kei DAIGO
タッチの行方 G
（2021年　ROSCO委嘱作品　初演）
Whereabouts of Touch G (2021)

夏田　昌和
Masakazu NATSUDA
エレジー
（2022年　ROSCO委嘱作品　初演）
Elégie, pour violon et piano (2022)

桑原　ゆう（くわばら ゆう）Yu KUWABARA

リリスの儀式

Rites of Lilith（2022年　ROSCO委嘱作品　初演）

＜作品解説＞

《リリスの儀式》は、トロンボーンの村田厚生さんとピアノの中村和枝さんのコンテンポラリー・デュオにより委嘱され、昨年 12 月 17 日に初演された《クロノスーカイロス》の、いわば「ネガ」とでもいうべき作品である。というより、互いに互いの「ネガ」であり「ポジ」でもある。

《クロノスーカイロス》は、同時に、しかし個々に円環状に存在する、テンポのちがう三種の音楽時間フィールドのあいだを振幅しながら、ひとつの形式を見出そうとした作品。第一の音楽に始まり、第二の音楽が時折挿入される。その切り替わりが次第に頻繁化し、曲の半ばを過ぎたころ、第三の音楽も挿入され、最終的に第二の音楽が優勢になる構成である。表立った音楽時間フィールドの裏で、聴こえない他二種の音楽時間フィールドが、常に別次元で進行していることを、あとで認識するような仕掛けである。

《リリスの儀式》は、《クロノスーカイロス》での音楽時間フィールドの関係性を、一部裏返した形で聴いてみたいと考え、書きはじめた。表は裏に支えられているが、同時に、裏は表に支えられている。裏と表の境界や隙間に入り込み、その「瞬間の同時」を複眼で捉えたい。《リリスの儀式》は、《クロノスーカイロス》における第二の音楽を第一の音楽とし、同様に、第一の音楽を第二の音楽として展開する。

第一の音楽は、四分音符＝60 の一拍子の空間に、次々に音を投げ込んでいく様相。ヴァイオリンはピッチカートで奏する。次第に旋律のようなまとまりとなる。第二の音楽は、ヴァイオリンのグリッサンドとピアノの点描の組み合わせで、ねじ曲がるひとつの太い線がえがかれ、拍子の頻繁な変化と重心の入れ替わりが独特のうねりを表出する。第三の音楽は、裏返るエコーの世界。さらに、《クロノスーカイロス》には現れない、第三の音楽とわずかにテンポのちがう、第四の音楽も扱った。

曲名は、マーク・ロスコの作品〈Rites of Lilith, 1945〉による。前述のとおり、音楽の内容と曲名とに直接の関係はない。が、委嘱を受け、どんな作品を書こうかと「ROSCO」で頭をいっぱいにしていた時期に、意外な角度から〈Rites of Lilith, 1945〉に出会ったのがおもしろく感じられて、タイトルとした。

＜プロフィール＞

1984 年生まれ。東京藝術大学音楽学部作曲科卒業、同大学院音楽研究科修了。国立劇場、静岡音楽館 AOI、神奈川県立音楽堂、横浜みなとみらいホール、箕面市立メイプルホール、ZeitRäume Basel（スイス）、cresc... 現代音楽ビエンナーレ（ドイツ）、Transit Festival 20·21（ベルギー）をはじめ国内外で委嘱を受けるほか、ダルムシュタット夏季現代音楽講習会、ウルトラシャル･ベルリン（以上ドイツ）、モストラ･ソノラ･スエカ（スペイン）、ルツェルン音楽祭（スイス）、ロワイヨモン作曲講習会（フランス）、ミラノ国際博覧会（イタリア）、ミュージック・フロム・ジャパン（ニューヨーク）、トンヨン国際音楽祭（韓国）等、世界各地の音楽祭や企画等で作品が取り上げられている。楽譜は、Edition Gravis、Edition Wunn（共にドイツ）より出版されている。声明、神楽、民俗儀礼等の取材を重ね、日本の音と言葉を源流から探り、文化の古今と東西をつなぐことを主軸に創作を展開。「淡座」メンバー。洗足学園音楽大学非常勤講師。第 31 回芥川也寸志サントリー作曲賞受賞。https://3shimai.com/yu/

北爪　裕道（きたづめ ひろみち）Hiromichi KITAZUME

クロマティクス

Chromatics for violin and piano（2022年　ROSCO委嘱作品　初演）

＜作品解説＞

今回、ヴァイオリンとピアノの二重奏という歴史的に無数のマスターピースが存在する編成で作曲する機会をいただき、緊張しました。その時その時の楽器や編成の特性から「固有性」を見出し作曲の発想を得ていくことが多い私ですが、これはあまりにオーソドックスな編成。腹をくくって、ピアノの内部奏法なども使わないという方針を立て、いざ向き合わんとしました。が、結局は肩の力を抜いて、自分の自然な感覚に身を任せることにしました。

タイトルの「クロマティクス」は半音階（chromatic scale/chromatic）から来ておりその複数形ですが、色彩論の意味もあります。曲中のほとんどのモチーフは、その音高構造が半音階によって構成され、またそれらのリズムや構成もなんらかの形で "chromatic" から発想を得ています。そのまま使うには躊躇ってしまう、このようなシンプルでティピカルな素材を用いて、いまの自分の作曲技術と感性のバランス（?）を測ってみることにしました。

ROSCO結成20周年、おめでとうございます。作曲の勉強を始めたばかりの頃より、リサイタルやCD、そしてインタビュー記事などもフォローして、その第一線でのご活躍から常に刺激をいただいてきました。心から感謝申し上げます。

＜プロフィール＞

幼少時よりピアノとソルフェージュ、次いで指揮法、コントラバス、作曲理論を学び、東京藝術大学作曲科に入学。並行して桐朋学園大学などで指揮を学ぶ。在学中より様々な作編曲活動のほか、指揮者としても多くの演奏会に出演、国内外の新作初演も多く手がけた。2013 年より、文化庁新進芸術家海外研修制度、ロームミュージックファンデーションなどから給費を得てパリに滞在。パリ国立高等音楽院作曲科第一・第二課程およびIRCAM（フランス国立音響音楽研究所）作曲・コンピュータ音楽課程をすべて首席で入学および修了。作品は、ソロからオーケストラまでの器楽や声楽、電子音楽、インスタレーションなど多岐にわたる。また音に対するこだわりと様々な領域における探求から、独自の楽器制作なども多い。近年はテクノロジーを駆使した活動も多く、自作品以外の音響技術やコンピュータ音楽のシステム構築も手がけている。現在、東京藝術大学、桐朋学園大学、国立音楽大学非常勤講師。